

まだ見ぬわかものたちに  
——瓜生山学園設立の趣旨——

学校法人瓜生山学園 京都芸術大学  
創設者 徳山 詳直

\*本文章は、  
学校法人瓜生山学園 京都芸術大学 創設者の徳山詳直が、  
当時理事長の立場で掲げたものです。

まだ見ぬわかものたちに——瓜生山学園設立の趣旨——	一九七六年秋	3
藝術立国——平和を希求する大学をめざして——	二〇〇七年新春	17
京都文藝復興	二〇〇〇年四月	31
通信による芸術教育の開学にあたって	一九九八年六月	47
大学名の由来		57



まだ見ぬわかものたちに  
——瓜生山学園設立の趣旨——

この大学は現代文明への深い反省と激しい苦悩の中から生まれた。

新しい世紀を目前にして、私たちは今日、大きな壁の前に立たされている。

科学技術と経済論理によって支配された現代社会は、それ故に、人類史を貫いてきた精神の尊厳、人間であることの意味を、根底から問われるに至った。

もはや、いわゆる国際化、情報化という手段のみによっては解決できない。

良心を手腕に運用する新しい人間観、世界観の創造こそ大切ではないだろうか。私たちは、芸術的創造と哲学的思索によって、この課題に応えたい。

一九九一年 春

いま、ここに、学園は新しい出発の時を迎えようとしています。

この時にいたって、私は、一つのためらいをかくすわけにはいかないのです。

今日の状況下で大学をつくることの物理的な困難についてはいうまでもありませんが、もっとも大切なこと、——それは、高い理想を掲げ、わかものたちを集める教育研究の場に当る者は、みずから未来への展望と、それを実現させていく深い思想を持たなければならない、集まってくる青春群像にむかって、「かく生きるべし」と堂々と語りかけるものを持つていなければならない、ということなのです。

わかものたちにはわかものたちの青春があります。私の青春時代を通じて培ってきたものが、きみたちわかもの的人生にどれほどの糧となることができるか。——こう考えてくるとき、みずから恥入ることのいかに多いことか。

戦後の混乱期に青春を過した私にとって、それは、痛みと憤りなしに振り返ることのできない時代でした。と同時に、それ故にこそ一種の鮮烈な精神の高揚を味わいつつ生きてきたこともたしかなです。

青春というものは、いつの時代でもそうしたものではありませんでしようか。それならば、私は、私の夢と信念をわかものななかへ投げつけて、一緒にひたむきに生きて行くほかはない。

こう念じつつ、私はこれから一つの決意をきみたちに語ろうと思う。

美しくよそおいたまえ——美とは「心の姿」である。

この学園は、美について語り、美をさぐるものの集まりとして存在しています。

美を求めようとするものは、当然その人固有の美観でみずからをよそおい、自分のもつとも美しい姿を他に見せようとするものだし、他人の美しさに対してもすこぶる豊かに感動するものだと思うのです。

だから、この学園は常に美を意識し、美しさについて敏感なわかものたちの群がる場であるべきだと思ひ、したがってまた自他の美をきそい合う場になることも当然だと思ひています。

そこで誤解のないように言っておきますが、〃自己をよそおう〃という場合、ただ単に服装や容姿にこだわれないのではないのです。なぜなら、人間の美しさというものはそういったもので左右されるものだとは決して思ひていないからです。

学生は本来貧しいものです。

ぜいたくをした美しさは大切だし、そうしなければ得られない美というものも当然存在しますが、おかねをかけない美、貧しさの美というのもまた立派に存在するし、ある意味では学生のみならず許されたひとつの特権的な主張のしかたではないかとも考えます。



さらに言うなら、若さの美というものは物質というものはねのけたところで完全に主張しうるものだとも言いたいのです。

また、人間の美しさというものは、その人格が美を意識すると否にかかわらず、いついかなるときでも、自然にあることがすなわち一種の美の表現でもありうるのです。

たとえば、恋愛に破れたとき、きみは激しい衝撃のなかで、生きていることを否定したいくらい悩むかも知れない。けれども、そのときの衝撃のあり方や悲嘆のあり方にも、深い人間的な美が内在すると思います。

肉親の死や自己の才能への絶望といった苦悩のなかにあっても、その人間の全的な表現の中にごくれた美しさがひそんでおり、さまざまのよろこびやひたむきな勉強、友との語らい、遊びの一瞬の中にそれぞれの美しさは見い出せると思います。だからこそ、昔から芸術家たちはさまざまの手法で、くり返し人間を描いてきたのでしょう。

だれしもが自分を美しく見せたいという願望を持っている以上、そんな日常のくらしのすみずみにも美の原型がひそんでいるということ、美はおかねではなく人間の生きざまの総体の中にその原点が存在しているということ、よくわかってほしいと思います。

あそびたまえ、試みたまえ——より豊かさを求めて

大学というところは、学問の府であって真理の探求を志すところであると言われていました。

いかにも、もっともな考えただけれど、これは大へん古典的であって現実の大学の姿をほんとうにあらわしていることばではないと思います。

現実の大学は、過酷な進学競争と愚劣な就職闘争の谷間に位置し、受験地獄からの浅薄な解放感と、将来の社会生活に対する危惧のなかでの一種の不安定期間、あるいは人生におけるかりそめの期間であって現代学歴社会に入りこむための資格取得期間にしか過ぎなくなっています。

真理の探求といっても、それを標榜する先輩諸賢が、どんなにこの国や世界を荒廃させたことでしよう。戦争を起こし、人間を傷つけ、公害を許し、いかに汚辱に満ちた生活をしてきたかを私たちはまざまざと見てきたのではなかったでしょうか。

不変に大学の理念とされる「真理の探求」が、果してなんであったか、今深い反省をこめて疑わざるを得ません。

さらに、

真理の探求の使徒としての学者一般に対しても、卒直に言って批判的にならざるを得ないので。すぐれた学者、尊敬する学者は数多くいるけれども、またみずからの生活と体面のためにのみ存在していると思える学者のいかに多いことか。その信ずるところに従い、矛盾や悪に対して断乎として所信を貫く反逆の姿勢を示しうるひとがあまりに少ないのです。

きみたちはわかものらしくするどく純粹なひとみを持つているから、そうした先生をすぐ見破ることができるし、したがって信頼もせず、教えを乞うこともしないでしよう。ただ、就職のためには卒業しなければならぬから、単位だけはとにかく取っておこうとします。また先生は、そうしたきみたちを見て特別な苦痛を感じるわけでもありません。

そこには冷たい断絶の関係があるので、学生生活はみのり少なく、空虚で生半可な知識だけを詰めこんで卒業していつてしまうのです。

私はそんな大学はぜったいにつくりたくありません。

この短い期間にいかほどのことをきみたちに与えられるかは疑問だけれど、ぜひ伝えたいのは、

なにが美しくてなにがみにくいのか

なにがほんとうでなにが嘘か

ひとを愛するとはどういうことなのか

人間とはどんなものか

いかに生きるべきか

などといったことにつけると言えましょう。

私は、今ここに「美」や「芸術」をさぐる大学をつくり、人間的で、わかもの的で、反逆的かつ真摯な教師たちとともに、きみたちを迎えようとしています。

美を基軸とした人間観、世界観、生きざま論をぶつけ合い、語り合い、はぐくみ合ってゆきたいと考えています。

そこできみにお願ひしたいのは、大いに遊べ、そして大胆に試みよ、ということなのです。少年時代から青年期に移り変わるその純粹で貪欲な時代に、きみの持つ世界を画然とおし抜け、さまざまの事象をきみの内部に蓄積してほしいと思うのです。

友との遊び、異性との交わり、おとなの世界への一歩、旅、音楽、文学、スポーツ、さらにきみの得意とする創作上の試み、手をつけたことのない創造への道程、すぐれた芸術家たちとの接触、労働や生活の体験など、目もくらむような試みのなかで、きみという人間をみつめ続けてほしいと思うのです。

そうした体験と観察・自己洞察と反省の数々をこのキャンパスのなかへ持ち帰ったとき、きみの信頼する友人や、尊敬する教師たちはきみに助言を与え、かれらの体験を語り、すぐれた人間としてのきみの生き方を多く示唆してくれるでしょう。

ここでは、きみの人格はこの狭いキャンパスをのり越えて、人間的に豊かに生育するにちがありません。

そこに大学としてのひとつの意義があると考えます。

友を求めたまえ——美<sup>うるわ</sup>しきまどいの年代

学生時代というのはよき師を得る時代であるとともに、よき友を得る時代でなければならぬと思っています。

私じしん、多くの師と多くの友にめぐまれているけれども、ほとんどが学生時代に得た師と友です。この人たちがなくして今日の自分はある得なかつたであろうと言いうる程、深い連帯感のなかで私は存在しています。

考えてみれば、この短い学生時代、学園はなにほどのこともきみたちに教えることはできず、大で学んだことが、社会に出たときにどれほど役立つかを語ることは非常にむずかしいことでしょう。むしろ大胆に言うなら、無限ともいえる膨大な学問の量をむりやりきみの内部に蓄積させるべくけんめいに働きかけるより、同世代のわかものたちがあい寄って、ひとつの共感を持ち合う場をつくることのほうが、大学自体としては大切なものではなからうかとも考えたりしています。

まさしく学園というところは、きみたちがいずれ知るのであるということができるでしょう。学生は、矛盾や罪悪をきびしく直視する若さ、純粹さを持ち、したがって理想やロマンをかざらず語ることができるのみか、すべての学生が、おたがいへの善意をもって共感しうる、めぐまれた場であることは明らかだと思えます。

人間は、ひとりでは絶対に生きていけない、だれもが自分を理解し、昂めてくれる相手求めて  
いることは厳然たる事実です。

芸術や美の世界は大へん孤高なものではあるけれども、自分の作品を認めてくれる友人があれば、  
それはどんなに幸せなことでしょう。その友人が多ければ多いほど、よろこびはまた大きいにちが  
いありません。

多くの友人を求め、語らいと哄笑のなかで、自己を友と比較したまえ。友のこころを理解し、共  
感しようとしてとめたまえ。またかれらのすぐれた部分を奪いたまえ。そしてかれの持つ悲しみや、  
時として深く沈潜しているかれの孤独を静かに見守ってやつてもらいたい――

教師の自己否定——師もまたきみとともに悩めるもの

「師」とは一体何だろう。

「師」とはまず、きみよりすぐれた知識とすぐれた技術を持ち、またすぐれた感性と理論を持っているものといえます。

そしてきみたちに、自己の考え方や感性についての共感を求めつつ、全人格においてきみを圧倒し、その力を伝えようとするものです。

さらに教師は自分の体験や人間観によって、きみの内部にひそんでいる可能性、たとえば才能とか感性といったさまざまな全人格的なものをひきずり出し、きみにそれを認識させ、きみの特技と個性をきみの意識のもとに置かしめる作業をなすものです。

だから、すぐれた師を持ったひとは幸せだし、かれはその一生を師の影響のもとに生きることになるでしょう。

しかし、そういうすぐれた師であってもその力は果して絶対的なものでしょうか。

否、絶対の芸術というものが存在しないのと同じく、絶対の師というものは決して存在しないと私は思います。

まず、その師であることを支える一つの重要なものは、(特に芸術、学問の世界においては)その人が培ってきた「業績」ですが、この業績というものはよほどのすぐれたひとを除いて、いずれ必ずその発展は停止し、また鈍化するものです。

これは、師の才能や体力、頭脳の力によるけれども、悲しいことに一定の時点、一定の年齢になるとどうしようもなく力の減退をきたすものだと思うのです。

業績の停滞と時を同じくして、師の理解力、洞察力も停滞し、あるいは鈍化します。またさらに感性も技術力も以前の燃えるような創造力をうしないがちです。

また、師を培った時代の文化的潮流が一定の爛熟期を迎え、これをのり越えて新しい潮流が台頭し始めると、師はそれを肯定するとしても、その主導的な立場をとることは一般的にはもはや不可能となり、新しい次の世代にそれをゆずらざるを得なくなりえます。

師は人生と学問の世界のむずかしさをしみじみとかみしめながら、みずからの業績を静かに観照し、それを深め、豊かに肉づけし、みのらせることがしごととなります。

そうした師の薫陶をうけてきたわかものたちは、師の偉大な業績をうけつぎ、師によって磨かれた創造力を縦横に駆使して自己を主張し、新しい時代と環境に対応するあらたなる思想の確立をはかるのです。

もはや、わかものたちは師をのり越えようとし、師の創作力に頼ることをしないでしよう。かれらは師の時代は去ったことを感じ、みずからを時代文化の先駆者と感じ、いよいよ後進を導く立場に立とうと考え始めます。



たしかに、時代の創造者たちによって、必ずその師はのり越えられ、先輩は否定されるものだと思います。

それが時代発展の真実の姿だと思います。

ことばを変えて言えば、師はみずから否定せんがためにこそ、わかものに立ち向かい、わかものを教えていくのだと言いたいのです。

むしろ一刻も早く、自己をのり越えるわかものを育てることこそ、師の師たる道ではなからうかとも考えるのです。

移り変わる時代と環境のなかで自己を確立し、より創造的たらしめようとする師のあり方は、いかにも苦渋に満ちたものであるし、その姿はまさに偉大という外はありませんが、その意味では教師もまたきみたちと同じく一個の学生としか言うすべはありません。

わずか数歩、あるいは数十歩、きみたちより先んじて歩いている先輩とでも言うべきでありましょうか。

もしきみが期すべきものを持ち、創造的たらんとする願いを持っているのなら、謙虚に師のことばを聞き、師の訴えんとすることを誠実に吸収しなければならぬでしょう。

青春、ひたすらに生きよ——時代はきみたちのものだ

こうして私は、きみたちにかくあれかしと願う学園の思想を語ってきました。

私もまた、きみたちと同じく私なりの道程を歩いている一個の学生にしか過ぎないのですが、立学に当って、私の日頃考えていることのいくつかを語ったつもりです。

学園は一步をふみ出したばかりです。

最初に言ったように、これまでの既成の大学のあり方や学生観にはとてもあき足りないし、何よりも多くの大学が性格上必然的に備えていなければならない人間観や世界観、とりわけ理想主義を失っていると思うのです。

青春は必ず次の時代を担うはずだし、それならばあくまで既成の観念のなかに閉じこもらず、新しい時代の創造をめざす活力を、大学は養わねばならないと思います。

たしかにこの時代は頼るべき権威は地に落ち、一国の支柱たるべき青春を養うための、世界へ向つての理念もまた枯渇しているかに見えます。

だから、この学園が新しい世界観や人間観創造のメッカとなり、同時にすぐれた次の時代を導く美の概念を生み出す土壌とさえなってくれたら——

そのためによるこんで私たちは捨て石になるつもりだし、この学園に集う多くの先生も意気こんできみたちを迎えようとしています。

ロマンを求めてあい語らえる青春、この時代、この現状にあき足りず、迷い深く、生きること、望みを求める青春。

きみたちにこそこの学園に集い、学園とともに生きること、を望んでやまないのです。

藝  
術  
立  
国

——平和を希求する大学をめざして——



■はじめに

わが学園が出発した一九七七年一月一〇日から満三〇年、ここにまた、新たな三〇年のはじまりの年を迎えました。

この学園の歩みは「まだ見ぬわかものたち」に向けた言葉から始まりました。その冒頭に私は次のように記しています。

いま、ここに、学園は新しい出発の時を迎えようとしています。

この時にいたって、私は、一つのためらいをかくすわけにはいかないのです。

今日の状況下で大学をつくることの物理的な困難についてはいうまでもありませんが、もつとも大切なこと、——それは、高い理想を掲げ、わかものたちを集める教育研究の場に当る者は、みずから未来への展望と、それを実現させていく深い思想を持たなければならない、集まってくる青春群像にむかって、「かく生きるべし」と堂々と語りかけるものを持つていなければならぬ、ということなのです。

新たな三〇年へ踏み出そうとするいま、その志は全く変わっていません。

学園創立の理想は「京都市藝復興」の運動に結実し、いよいよ「日本の藝術立国」を展望できるところまで来しました。

省みれば開学から今日に至るまで、二〇世紀から二一世紀へと移り変わる激動の時代でした。

ベルリンの壁が崩壊し、東欧に民主化革命が起こり、ソ連が崩壊して世界の冷戦構造が終わりを告げました。しかしそれでも、地球上に平和は実現されませんでした。

中東やアフリカなど、多くの地域で民族と宗教の闘争は激化の一途をたどり、二〇〇一年には、あのニューヨークの事件が起こり、そしていまなお、世界中で戦争と殺戮が繰り返されています。

この間、人口の爆発的増加による貧困と環境破壊は急速に悪化し続け、人類の生存を脅かしています。一九七四年に四〇億人に達した世界の人口は、二〇〇六年には六五億人を超え、このわずか三〇年ほどの間に二五億もの人口が増加しました。

地球資源の消費量において、一四億の人口を擁する中国が、先進国・米国を上回りました。その中国をはじめ、二〇三〇年には世界最大の人口となるインド、さらにその他の発展途上国が米国並みの生活水準に達したとき、地球はいったいどうなるのか。

地球が養うことのできる人口は、発展途上国の生活レベルで九〇億人から一〇〇億人と試算されており、明らかに人口の爆発は地球の許容量を超えつつあります。

人類は、叡智を結集して、環境破壊をくい止め、貧困を根絶して幸せを得るか。

それとも地球の資源を消費し尽くし、戦争と殺戮を繰り返しながら、滅亡への道を辿るか。

次の三〇年は、間違いなく、人類の生存を決することになります。

そう考えるとき、我々がいま進んでいる芸術の運動にこそ人類の未来がかかっている。「戦争と平和」「戦争と芸術」の問題をどこまでも訴え続けていこう。これまでもそうであったように、これからもこの道を一筋に進んでいこう。そういう決意が、改めて沸々と湧きあがってきます。

#### ■学園の現状とわが使命

わずか一七五人の入学定員から出発した学園は、三〇〇〇人の若者たちが集う芸術大学に成長しました。

通信教育の運動は一〇年目を迎え、六二〇〇人の社会人が学ぶまでになりました。言うまでもなく、わが文藝復興の運動が全国に大きく展開できるようになったのは、通信教育の成功に大きく与っています。

やはり開学以来取り組みはじめたこともと母親のための図書館の活動から「こども芸術大学」が生まれました。来年度からは四〇組八〇人の母と子が学ぶことになり、その活動も軌道に乗ってきました。兄弟校である東北芸術工科大学は、昨年一五周年を迎え、大学経営にとってはまことに厳しい東北の地で、「東北ルネサンス」を掲げて見事に闘っています。

東京に設立した日本文化藝術財団は、現代文明に背を向けて生きてきた人々、あるいは現代文明と正面から対峙して生きてきた人々、そうした人々に光をあてる活動を続けて、着実に地歩を固めてきています。

東京を中継して京都と東北を結び、世代を超え地域を超えて、良心ある人々とともに、「世界平和を希求する大学」としてさらに力強く前進していくための基礎が、確かにでき上がってきました。

そして何よりも心強いことに、わが学園には、若い優れた人物が数多く結集してきています。特にここ数年、多くの優れた人物を発掘することができました。京都でも山形でも、後に続く若い世代が生まれてきています。

その世代が存分に力を発揮できる体制づくりに寄与することが、理事長としての最大の使命だと認識しています。

#### ■新たな三〇年の展望

一、世代を超え、地域を超えた芸術運動をめざす

平和を求める芸術と文化の運動を、いかに世代を超え、地域を超えて、日本の隅々にまで浸透させていくか。それがわが学園の命題です。

日本全体を包み込みながら、世界へと広がる運動をさらに大きく力強く展開していかなければなりません。

#### (ア) 通信教育——社会人とともに

通信教育は、文藝復興の運動を日本全国へといきわたらせる血流となって、学園の大きな柱に成長しました。この通信教育によって、多世代、多地域に開かれた新しい大学の展望が生まれました。この通信教育をさらに発展させることが、文藝復興の運動強化につながることは自



明です。そのため、今年から出発する通信制大学院の充実を進めながら、学部教育をいっそう充実させることが必要です。

年々拡充が続いている東京サテライトキャンパスの再整備に着手し、その上で、東京だけでなく、それぞれの地域における学生たちの活動を支援する「地域の拠点づくり」を進めます。

また、「こども芸術大学」の展開と歩調を合わせるかたちで芸術教育士の養成をめざすコースの設置や大学院の分野の拡充、さらに多くの人々が芸術に触れる機会を増やす教育の仕組みづくりなど、社会人の希望に沿う新しい通信教育の展開をめざします。

#### (イ) 「こども芸術大学」——こどもと母親との連帯

「こども芸術大学」の開学により、わが学園は、人間形成の基礎となる幼児期の芸術教育の第一歩を踏み出しました。今日のこどもをめぐる社会状況を見ると、こどもと母親のための芸術運動なくして文藝復興の更なる展開はありえないことが痛感されます。

「中南米やアフリカや、こどもたちが苦しんでいる国々に、この運動を広げてほしい。」在校生からそう要望されました。それが実現する日が必ず来ます。

東北芸術工科大学の「こども芸術大学」と連携して教育内容の充実に努めながら、その運動の全国への展開をめざします。さらに「こども芸術学科」において、こどもと芸術に関する探究を進めて原理と方法の確立をめざしながら、こどもと母親の教育にあたる若者を育成し、より強固な展開をはかります。

(ウ) 一貫した芸術教育の体系に向けて

わが学園は、一八歳から二〇代の若者たち、社会人、そして子どもと母親が、共に学ぶ大学に変貌を遂げました。しかし、六歳から一歳までの児童、一二歳から一七歳までの生徒たちに、我々の芸術運動をどう広げていくか。幼児から社会人に至る一貫した芸術教育の体系は、どうしても取り組まなくてはならない課題です。

今後、こども芸術学科を中心とする教育研究の成果や、「こども芸術大学」の活動、高校大  
学間連携の取り組みなどを糸口にして、東北芸術工科大学が展開する「全国高等学校デザイン  
選手権」の成果にも学びながら、その課題に取り組みます。

二、京都と東北を結んで日本の復興をめざす

振り返ってみれば、敗戦後の焦土と化した日本を見て、民族の歴史と文化の源流をたどり、日本人の魂の故郷を明らかにすることこそ日本復興への道であると考え、私たちは大学創設を決意しました。そして、日本文化の中心である京都に焦点をあて、その志を實踐する新たな芸術文化運動を「京都  
文藝復興」と名づけました。

しかし、短期大学を発足させ、新たに大学をつくり、芸術と文化の運動を通して日本の魂の故郷を求めていくうちに、京都が日本文化の中心となる以前、日本はいかなる姿であったのか、という疑問が湧いてきました。弥生の向こう側にあるものは果たして何か。

その疑問に背中を押されて、東北の大地を歩き回りました。そして、東北こそ日本に残された最後

の「母なる大地」であり、現代文明の過ちを克服するための最後の砦であると確信したとき、この大地に大学をつくり、東北と京都とを結んで、縄文から弥生に至る深い歴史の底から日本のあるべき姿を探求する運動をはじめようと決意しました。

それが、東北芸術工科大学の出発点でした。

京都造形芸術大学と東北芸術工科大学は、それぞれ特色のある自立した運営をはかりながら、共通する理念のもとに連携して事業を行ってきました。

二〇〇〇年…単位互換制度を制定

二〇〇一年…東京サテライトキャンパスを共同開設

二〇〇二年…交換留学制度を開始

二〇〇三年…韓国事務所（ソウル市）の共同運営を開始

二〇〇五年…「こども芸術大学」を両大学に開学

京都造形芸術大学「世界アーティストサミット」と東北芸術工科大学

「全国高等学校デザイン選手権」との協力連携を開始

二〇〇六年…「東アジア芸術文化研究所」を開設（京都造形芸術大学、東北芸術工

大学、韓国・弘益大学の三大学共同事業）

日本のあるべき姿を世界に向かって示していく道は、東北と京都、縄文と弥生の文化を一直線に結ぶ姿を描き出す運動にあると確信しています。

「いづれも芸術大学」の同時開校は、両大学に共通する理念を鮮明に示しました。

京都と山形を結び、蓼科の附属康耀堂美術館や東京の日本文化藝術財団を中継し、通信教育部生や卒業生たちの協力を得ながら、全国に「美術館大学構想」の理念を広げていくことも夢ではありません。

京都造形芸術大学と東北芸術工科大学の二大学連携による全く新しい大学運営の姿を示しながら、芸術による日本再生の運動を確実なものにします。

### 三、東アジアと連帯し平和をめざす

朝鮮半島では、世界を揺るがす事態が起こりつつあります。

昨年、北朝鮮は核実験を行って、世界中から非難を浴びました。しかし、考えてみれば、アメリカこそが世界最大の核保有国家です。しかも、人間の上に核爆弾を落とした経験がある国は、唯一アメリカだけです。そのアメリカは、いまなお一萬発の核弾頭を保有しています。世界中でロシア、中国、フランス、イギリスなど九カ国に合計約三萬発、地球を三〇回以上破壊することのできる核弾頭が存在するのが現実です。いままたイランに触発されたアラブ諸国が、核拡散競争に奔走しはじめました。

このとき、なぜ大国が核廃絶の先頭に立たないのか。

幸せを求めながら憎み合い殺し合う人間の愚かさが、平和を妨げ、地球を脅かしている。

南北ベトナム、東西ドイツが統一を果たしながら、朝鮮半島ではいまでも、民族と国土の分断状態が続いています。

半島全土が焦土と化す熾烈な戦争を経験し、五〇年を超える歳月を経て、なお分断の中にある民族の苦しみを、我々は、どう受けとめるのか。

そして、民族統一への悲願を抱く韓国・朝鮮の人びとと、いかに手を携えていくのか。

朝鮮半島の対立と緊張が解かれ、朝鮮民族の分断と悲しみの歴史に終止符が打たれてこそ、東アジアの連帯と平和への道が拓けます。

そうした東アジアの現状を考えると、中国の存在が大きく浮かび上がってきます。

中国は、世界政治において大きな影響力を発揮するようになってきました。その動向は、東アジアの命運を決定的に左右します。

東アジアの中の日本は、中国とどう向き合い、韓国とどう手を組んで、危機を乗り切っていくか。

その問題の解決を見出すために、東北芸術工科大学、韓国・弘益大学校との共同により、「東アジア芸術文化研究所」が設立され、いよいよ活動を開始します。この活動には、延世大学校や梨花女子大学校など、韓国の他の有力大学が加わります。さらに中国とも共同していきます。

日本、韓国、中国をはじめとする東アジア地域の伝統及び現代芸術文化の研究、芸術文化の交流史研究、そして教員・学生間の実際の学術交流を通じて、人類の危機の時代に、「東アジアにおける平和の問題」あるいは「芸術と文化による民族連帯の問題」に挑みます。

#### 四、芸術の創造力で社会の変革をめざす

芸術を学ぶ若者に、人類危機の時代を克服しようとする強い意志をどう植えつけるか。他者の痛み  
に想像力を働かせ、多くの人々の幸せのために芸術の力を用いる姿勢をどう養うか。困難な問題を解  
決し社会を変革する創造力をどう身につけさせるか。すなわち、芸術家魂をもった若者をどう世の中  
に送り出すか。文藝復興とは、文藝復興を担う人間の育成にほかならず、それこそが学園の最も  
重要な使命であることは、言うまでもありません。

そのために、さまざまなカリキュラム上の改革が進んでいます。学生たちの生き活きとした姿を頻  
繁に眼にするようになりました。学園の理想は、次第に学生たちに浸透しつつあるように見えます。

この改革を強く推し進めながら、同時に、人類が直面する困難な課題を克服する鍵は人間の「想像  
力」と「創造力」にあることを、強く社会に訴えていかなければなりません。

この大学で学んだ学生が社会の中に活躍の場所を獲得してはじめて、大学は教育機関としての役割  
を果たすことができます。学生の活動を、全力をあげて支援し、若い「創造力」を社会の変革に役立  
てることのできる体制構築をめざします。

#### 五、芸術運動の理想と哲学を探究する大学

芸術の立場から「戦争と平和」の問題をどう捉えていくか。

この世界の状況をどう認識するか。

その理想と哲学を学び伝えることが、基本です。

理想なくして大学は存在できず、また、依って立つ哲学なくして芸術の運動は存在しえませんが、

美とは何か。愛とは何か。

人間とは。そして、生命とは――。

もう一度繰り返しますが、大学が発祥して三〇年。わが学園にとって、これまでは闘う基盤づくりでした。

しかし、いよいよこれからは、大学の死命を決する三〇年になります。

ヨーロッパ・ルネサンスが起こった時代、世界の人口は、わずか四億人でした。地球は無限であり、人間の可能性も無限だと信じられた時代に、ルネサンスの運動が展開され、人間を万物の至上におく近代へと続く歴史の基礎となりました。しかしいまや、地球は有限であることが明らかになりました。我々の「文藝復興」は、近代を支えた「ルネサンス」とはまったく似て非なるものです。

地球は有限であるという認識を基盤に、芸術と文化による人間精神の復興と世界平和をめざす新たな運動こそ、我々が提唱する「文藝復興」の運動なのです。

芸術とは何か。

芸術は戦争を抑止できるか。

芸術は地球上から貧困を根絶する力になるか。

芸術は人類の新たな救世主たりえるか。

「平和を希求する大学」としての旗幟を鮮明にし、後に続く世代を信じて、命のある限り闘っていく決意を新たにしています。

二〇〇七年 新春



京都文藝復興

## 京都文藝復興

二十世紀は、科学と技術の長足の進歩とはうらはらに、混沌と汚濁に満ちた世紀であった。

国家、宗教、民族間の果てしない対立と闘争、貧困と飢餓と殺戮の悲しむべき世紀であった。

遠く十三世紀末、ルネサンス期に湧き起った人間賛歌の思想は、人間の存在を万物の至上におく近代思想となり、やがて欲望の歯止めのきかない激流となって、ついには人類自らを生存の危機に追いやった。

しかし、今日ようやくにして、  
人間は自らの誤りに気づきはじめた。

果たして人間とは何か。

有史以来人間は、

喜びと悲しみ、愛と憎しみ、希望と絶望に翻弄される宿命を負いながら、  
万物のひとつとして、その共生の中で、  
生存してきたのではなかったか。

生きるとは何か、生命とは何か、それらを大きく育む宇宙とは何か。

哲学や宗教、文学や芸術表現が追求し続けてきた、この根源的な問題について、  
今や良心ある多くの人々が、生涯をかけた探求へと向かいはじめている。

我々はそこに、万物に対する謙虚さと天地自然への畏敬の念に満ちた、  
創造的精神の復興の兆しを見いだし、  
現代を超克し未来を拓くに至る、たしかな可能性を確信する。

学生諸君、

この時代、この日本の姿を、

きみたちの鋭く純粹な眼でじっと見つめてほしい。

そして

きみたちの先輩が重ねてきた青春の試みの数々と、

何よりも

きみたちの美と真実を求めるいきいきとした心の姿が、

芸術の国日本を再び蘇らせる運動、精神の尊厳を回復する戦いへと

この学園を立ち向かわせてくれることを願う。

きみたちの存在と

きみたちの共感なくして、

学園の未来はありえない。

教育の使命とは何か。改めて問い直したい。

いまや、世代や人種、国境を超えて、  
心あるすべての人々と共に、  
真実を求め、理想を語り合い、希望を育む土壌となるべき、  
新たな学園像をこそ、構築しなければならない。

東洋の思想と叡智を基調とする、  
人間精神復興の壮大な実験と冒険に挑む勇氣と、  
芸術文化探求への絶えることなき研鑽が、  
人類を希望ある未来へと導くことを信じ、  
学問と宗教、芸術と文化の都、  
この京都の地から発する文芸復興の鼓動が、  
日本の魂を静かに深く揺り動かすことを願って、  
ここに新たな出発を誓う。

学校法人瓜生山学園

創設者 徳山 詳直

□「通信による芸術教育」が示す芸術文化の可能性

一九九八年四月、本学園に、全国で初めての四年制総合芸術大学の通信教育部が開設しました。

この通信教育部には、一二、〇六六人の社会人の方々から入学の希望がありました。入学希望者の在住地域は、関東、近畿を中心に沖縄から北海道まで全国に広がっており、年齢も三〇～四〇代を中心に二〇代から八〇代までと幅広く、学歴も、高校卒から大学短大卒、さらには大学院卒まで、まさに多種多様です。そのうち一、四〇〇人の人たちが入学し、京都・瓜生山に集まって、熱気に満ちたスクーリング授業が行なわれました。

従来の通信教育部は、何らかの事情で大学に学ぶことのできなかった人たちが、大学卒業資格や教員免許状など、さまざまな資格を求めて入学するというのが通例でした。しかし、本学に入学した方々の入学理由をみますと、単なる資格の取得にとどまらないことがわかります。現在の自分の生き方をいま一度再考し、混迷する時代の中で、芸術文化に新たな価値観や世界観の可能性を見出し、本来の意味での生涯学習の機会を求めて、集まってきているのです。

そして、もうひとつ特徴的なことは、芸術文化を京都で学ぶということに、たいへんな期待を寄せているということです。京都にある芸術大学だからこそ、本学園を選んでいるのです。

通信教育部の初年度の募集だけでも、これほど多くの人々が、芸術文化の本質を学ぶために、全国か

ら京都という地に引き寄せられるように集まってきたという事実は、私たちに、新鮮な驚きをもたらしました。

この夏スクーリング授業のために集まった社会人の方々は、いうまでもなく、観光のために京都にやって来たわけではありません。京都で芸術文化を学ぶために集まったのです。八月一日から九月五日まで二七日間にわたって、京都に触れ、京都を知り、京都で学んだ成果をもって、また全国各地に帰っていったのです。この運動は、これからずっと、毎年続いていきます。この年が初年度の通信教育部は、四学年が揃う二〇〇一年には万人を超える規模になります。高い志と熱意をもって芸術文化を求める万余の人々が、毎年、京都と全国各地とを結ぶ役割を果たすことになるのです。

私たちは、そのことの意味を深く受け止めたいと思います。そして、そこに日本文化と京都の将来に対する希望を見出し、私たちの大学改革の原点に据えたいと思います。

#### □学問と宗教の都市、京都

京都は千年以上の歲月、学問と芸術の都市として、全国から青雲の志に燃えた人々を集め、生気みなぎる都市として展開してきました。

平安の王朝文学や芸術を生み出した文人や画工たち、くだっては、狩野派や円山派、淋派に連なる画

人、蓮如、一休、吉田兼具らの宗教家、茶道・華道の源流をなした千利休や池坊専応、また藤原惺窩、本居宣長、伊藤仁斎ら儒学、国学、古学の大人たち、曲直瀬道三から山脇東洋にまで至る医家、宮崎友禅、樂長次郎、野々村仁清などそれぞれに派をなした工芸家たち。京都で学び、京都を活躍の場とすることによって、芸術文化の祖となり大成者となった人々は、枚挙に遑がありません。

京都が、こうした豊かな芸術文化都市たりえた背景には、中世以来の伝統があります。中世には、中国古典の研究・教育が、五山をはじめ多くの寺院で行なわれ、こうした蓄積に町人の経済力が結びついて、近世、京都の学問と芸術文化が発展する原動力となりました。

中世まで歴史を溯ってみるまでもなく、現在の京都にある大学を見わたしてみれば、教育と宗教との結びつきが極めて深いことに気づきます。

京都市域には、六校の国公立大学、二校の公立短大と二二校の私立大学、一五校の私立短期大学があります。この私立大学二二校のうち一一校、私立短大一五校のうち一〇校、すなわち私学三七校のうち二二校が、実は、宗教を母体としていのです。その中にはキリスト教の精神を掲げる大学が四校ありますが、それもまた、京都の豊かな精神風土を表わすものにほかなりません。

このように、ひとつの市域に四〇を超える大学が集まり、しかもその大きな部分が宗教を母体にしているのは、全国でも京都だけです。

京都には、三、〇〇〇を超える寺があり、二、〇〇〇をわずかに下回る神社を加えると、五、〇〇〇に



のぼる社寺が存在しています。同じ寺といっても、京都には、全国に末寺を抱えた本山が数多く存在しています。中世から近世にいたる時代、人々は宗教と学問を究めるため、京都の本山をめざしました。京都は、まさしく宗教と学問の府でありました。

京都の私学の創立もまた、古く天長年間（八二四〜八三四年）に空海によって興された綜藝種智院まで溯ることができます。そして、驚くべきことに、その精神は、現在もなお、真言宗東寺を母体とする種智院大学に受け継がれています。

このように、教育と宗教とは深く結び合って、遥か一、二〇〇年にわたる京都の学芸の歩みを支えてきたのです。

#### □大学流出の根底にあるもの―京都文藝復興へ

今日、残念なことに京都市域から大学の流出が相次いでいます。その理由として、市域内での用地確保の困難さや工場等制限法の規制が、しばしば指摘されています。

しかし、それ以上に、京都の支えである学問、芸術、宗教に対する認識の欠落、これこそが問題なのではないでしょうか。

政策というものは、まさに、都市についての哲学の表明でもあるはずですが、そうだとするならば、私

たちは、さらに深くこの問題を考えてみなければなりません。

今日までの、京都における諸大学流出の経過をふりかえると、次のとおりです。

一九六七年 京都文教短期大学が宇治市槇島町に移転

その後、一九九六年に同一キャンパス内に京都文教大学を設置

一九八六年 同志社大学と同志社女子大学が京田辺市（当時の田辺町）に校地を開設

「田辺キャンパス」に同志社女子大学短期大学部を設置

一九八七年 成安女子短期大学が長岡京市に移転

同 年 平安女学院短期大学が高槻市に移転

一九八九年 龍谷大学が「瀬田キャンパス」に理工学部、社会学部を開設

一九九三年 成安造形大学が天津市に開学

一九九四年 立命館大学が「びわこ・くさつキャンパス」に理工学部を移転

こうした大学流出の結果、本来、京都で学ばずであった大学生約一六八、〇〇〇人のうち、四四、〇〇〇人が京都を去って行きました。これは、実に学生総数の四分の一を超える数字です。

次代を担う四四、〇〇〇の青春、それも豊かな教養を備えるべき若者たち四四、〇〇〇人が、学芸都

市・京都で青春を送る機会を失ったということは、郊外の広く設備の整ったキャンパスで学ぶこと以上に、失うものが大きいはずです。そのことは、京都にとって、さらには日本文化の将来にとって、まことに不幸な事態だといわざるをえません。

果たして、戦後、京都の復興のためにどういった政策が取られてきたでしょうか。

一九九〇年から問題化した京都ホテルの高層化、平安建都一、二〇〇年記念事業として計画された京都駅の高層化、さらに溯れば、一九六四年東京オリンピックの開催に合わせて計画された京都タワー建設。こうしたものには大幅な規制緩和策がとられながら、なぜ学問と芸術の復興のためには思い切った政策が行われなかったのか。かえすがえすも残念でなりません。

そればかりではありません。こうした一連の政策が、市政と宗教との間に深い亀裂を生み出す結果となったことは、京都における教育と宗教との深い結びつきを考えるならば、いつそう憂慮すべき問題であるように思われます。問題は、経済の発展か景観の保全か、という次元にとどまるものではありません。

京都から、寺と大学、すなわち、宗教と学問を取り去ったら、いったい何が残るでしょうか。

日本全体が精神的支柱を失っているかみえる今日、日本文化の中心といわれる京都、それを支えてきた学問と芸術と宗教と市政との豊穡な結びつきを取り戻すことが、次の時代に新しい学問と芸術文化の可能性を拓く大きな力となるはずです。

そして、中世イタリアのルネサンスが、芸術文化の清新な息吹と豊かな産業の勃興との結びつきによって興りえたように、京都の文芸復興はまた、産業とも深く結びつくことによって、互いに輝きを増すに違いありません。

このことを私たち市民がしっかりと認識するところから、京都の再生への道がはじまるのだと思います。

□危機を克服し未来へ希望をつなぐために

かつて京都は、二度の大きな危機を経験しました。いうまでもなく、ひとつは応仁・文明の乱、もうひとつは東京遷都です。

応仁元年（一四六七年）から文明九年（一四七七年）まで続く応仁・文明の乱によって、京都の市街地の大半は、焦土と化しました。

しかし、京都は滅び去ることなく、学問と芸術は見事に復興され、寛永から元禄にかけて光悦、宗達、光琳に代表されるような、蒔絵、陶器、茶湯、書道、出版など多彩な芸術文化が開花し、京都が日本文化の最大の中核地といわれるに至った、文化的な基礎が築かれました。

続く京都存亡の危機は、明治期の東京遷都でした。武家政治の完全な終焉と封建制打破による近代化

に向けた国家的決断であったとはいえ、これによって京都の人口は三五万人から二三万人に激減し、平安遷都以来一、〇七五年度にして、京都は王城の地としての生命を終えました。

この危機を、京都は近代化政策によって乗り切りました。これはたいへんな努力のもとに達成された偉業でした。

いま、京都は三度目の大きな危機に遭遇しています。その危機は、ただに京都の危機というにとどまりません。今日、日本そのものが大きな危機に直面しています。

応仁・文明の乱が京都を焦土となしたにもかかわらず、学問と芸術とが見事に復興しえた理由はどこにあったのか。

また、東京遷都によって京都は滅び去る運命におかれたのに、なぜ再生に成功しえたのか。

あるいはまた、その近代化策には、どのような功罪があったのか。

こうした問いかけから、私たちは、危機を克服し未来に希望をつなぐための手だてを、学ぶことができるのではないのでしょうか。

#### □ 私たちの時代認識と大学改革

私たちの学園は、この危機を人類の存亡、人間としての精神の尊厳に関わるものと捉え、大学創設の

辞に、ひとつの時代認識として次のように記しています。

この大学は現代文明への深い反省と激しい苦悩の中から生まれた。

新しい世紀を目前にして、私たちは今日、大きな壁の前に立たされている。

科学技術と経済論理によって支配された現代社会は、

それ故に、人類史を貫いてきた精神の尊厳、

人間であることの意味を、根底から問われるに至った。

もはや、国際化、情報化という手段のみによっては解決できない。

良心を手腕に運用する新しい人間観、世界観の創造こそ大切ではないだろうか。

私たちは、芸術的創造と哲学的思索によって、この課題に応えたい。

(一九九一年四月 京都造形芸術大学創設にあたって)

京都を抜きにして本学園は存在しえず、また、学問と芸術の復興、すなわち学芸都市・京都の再生なくして、本学園がめざす日本の芸術文化の復興はありえません。

科学技術と経済論理が支配する現代の文明に代わって、芸術文化を原動力とする新しい文明への展望

を、京都が先頭に立って切り開いていかなければならないのです。

新しい世紀は、人類と自然への深い愛情に満ちた哲学を生み出すことから、はじめなければならない。日本にとって、このような教育こそ最も重要な課題ではないでしょうか。今日の日本の姿に苦悩し、その解決のために汗を流す大学。若者たちと共に、人類が直面する困難な課題に、果敢に立ち向かう大学。本学園は、日本が苦難に直面すればするほど、日本のために光り輝く大学でありたいと願っています。





通信による芸術教育の開学にあたって



一九九八年四月、発案から五年の準備期間を経て、ここに総合芸術大学としては日本ではじめての通信教育部が開設しました。昨年十二月末に文部大臣の認可を受けて以来、この通信教育部に二二、〇六六人の方々から資料請求と入学の希望がありました。そのうち一、四〇九人の方が入学手続きをしました。何らかの事情で出願は見送らざるをえなかった、しかしいつか芸術を学びたい、そう考える人たちが一人を超えたという事実は、私たちにたいへんな驚きと新たな希望をもたらしました。

文部省から許された定員は三〇〇人でした。当初本学が希望した定員は五〇〇人でしたが、そんなにも志望者は集まらないだろうと思われていました。通信教育、それも経済でもなければ情報でもない、〈通信による芸術教育〉にそれほどの期待があるはずがない、というのが開学前の大方の予想でした。しかしその予想は見事にはずれませんでした。

一二、〇〇〇余の方々の地域を見ると、関東、近畿を中心に全国に広がっています。年齢では三〇〜四〇代を中心に二〇代から八〇代まで、幅広い年齢層を構成しています。もちろん学歴も、高校卒から大学短大卒、さらには大学院卒まで、まさに多種多様です。入学の理由としては、技術の修得や資格の取得にとどまらず、芸術学や美術史などを通して芸術の根源を求めたいとする人たちも大勢います。このこともまた、私たちの驚きのひとつでした。

〈通信による芸術教育〉がこんなに幅広い層の人々に、これほど広範囲に支持されるのはなぜでしょうか。これにはいかなる必然性があるのでしょうか。

通信教育には実に様々な人々が集まってきています。ある人は、高校で美術を教える中で芸術の味の深さを感じ、すでに遅いと諦めかけていた芸術学をいよいよ学ぼうとしています。またある人は、病院勤めをしながらつづけてきた陶芸を、新たな気持ちで基礎から勉強しようと考えています。広告代理店でCMプランナーをしながら、通信教育によって自分を見直し、新たな可能性に挑戦したいと考えている人もいます。定年後の第二の人生を迎えて、両親の反対で諦めた芸術の道に進むことで、若い頃の夢を実現したいと願っている人もいます。介護福祉士を職業としながら、絵画を通して福祉のあり方を豊かなものにしようと志す人もいます。

それぞれに個々の理由の違いはあれ、芸術と文化を求める心は共通しています。芸術を通して自身と向かい合い、自分自身をみつめ、自分のおかれている状況や自分の生きている時代というものを考え直し、新しい自分の可能性や生き方を求めたい。意識するとしなないと関わらず、そうした自立的精神や批判的精神が底流にあることは確かなことのように思われます。

人々は、確かな拠り所が科学技術や経済にあるのではなく、宗教や哲学、芸術や文化にあることに気づきはじめてたのではないのでしょうか。〈通信による芸術教育〉は、そうした要請の拠点として、多くの人々の期待を集めつつあるのだと思います。

自然科学と社会科学を原動力として理性の上に築き上げられてきた現代文明、その功罪が明らかになるにつれて、歴史の中で生成し、蓄積され、伝承されてきた精神活動の総体である文化、そのあらわれである宗教や文学や芸術表現がますます重要なものになってきています。

どこに漂っていくかわからない日本の中で、そしてまた絶望的なほど混迷する世界の中で、一人をを超える人々が芸術の通信教育を求めているという事実は、大きな希望をもたらすものではないでしょうか。

果たして〈通信による芸術教育〉は可能か。私たちは繰り返し自問してきました。それは一見可能なことのようにも思われました。

芸術とは何でしょうか。芸術を教えるとはどういうことでしょうか。

ただひとつ確実に言えるのは、芸術とは感動する心をつちかうことであり、また、芸術を教えるとは感動する心を伝えることなしにはありえないということです。

私たちが〈通信による芸術教育〉にたいへん困難を覚えたのは、この感動する心を、通信という手段によって伝えることが、途方もなく難しいことに思われたからにほかなりません。しかし、今や通信という手段によっても、それは不可能なことではない。そうした状況が生まれつつあります。

遠くはベトナム戦争の教訓、近くは一九八九年十一月九日、ベルリンの壁の崩壊。破壊された壁の前で歓喜する人々の姿は、長きにわたって自由を囲い込むことは不可能であることを、感動のうちに私たちに教えてくれました。

あるいは一九九二年から激化したボスニアにおけるイスラム教徒、クロアチア人、セルビア人勢力間の血で血を洗う紛争。息子や父母や肉親を失った人々の悲しみの表情、瓦礫と化し荒廃した街の様子。

またさらには、アフリカをはじめとする発展途上国に人為的にもたらされた食糧飢饉によって、栄養失調状態におかれ、伝染病に侵されていく子どもたちの姿。

こうしたリアルタイムに送られてくる映像は、世界中の人々の喜びや悲しみ、憎しみや愛情、人間の愚かさのひとつひとつを、私たちの心に刻みつけるように伝えてきます。それは、私たちの心を震撼させます。私たちは、今を生きる人々の姿に、人間という不可解な存在に、人類が直面する苦難に、

感動し、共感し、悲嘆し、絶望し、あるいは歓喜します。

芸術は、感動する心だといいました。通信技術の発展は、画像情報を瞬時に伝え、遠く離れた人々の間に感動を呼び起こします。芸術が通信によって可能となると思われる根拠がここにあります。

現代の高度な情報通信技術は、まさに文明の、科学技術の、所産に違いありません。しかし、そうした技術を用いることによって、人間の豊かな精神活動のあらわれである芸術や文化を、感動のうちに伝えることが現実になりつつあります。

いや、ぜひとも私たちの手によって、現実のものにしなければなりません。

通信によって感動を伝える。試みはまだ緒にたばかりですが、〈通信による芸術教育〉の成否は、そこにかかっていると一言してもよいと思います。

去る四月末から五月初旬にかけて、京都の本学と東京においてオリエンテーションが開催され、約五〇〇人の参加者がありました。出席した教員の報告を聞くと、一様に、参加者の熱意と真剣さに圧倒されたという答えが返ってきました。ほんとうに、示し合わせたように、同じ感想が返ってきたのです。教員は皆、参加者の熱意と真剣な眼差しに怖れを抱いたようでした。その怖れは、教えるということに対する、本来大学が当然抱いていなければならない怖れだと思えます。

このことはとても大事なことです。教えるものと教えられるものとの緊張関係が惰性に帰したとき、大学というものは墮落の道を辿りはじめたに違いないからです。

この学園の創設にあたって、私は次のように考え、創設の辞に記しました。

移り変わる時代と環境の中で自己を確立し、より創造的たらしめようとする師のあり方は、いかにも苦渋に満ちたものであるし、その姿はまさに偉大という外はありませんが、その意味では教師もまたきみたちと同じく一個の学生としか言うすべはありません。

わずか数歩、あるいは数十歩、きみたちより先んじて歩いている先輩とでも言うべきではありませんか。

この考えは今も変わりません。そして、通信教育にこそ教師はいない、ということを感じます。長い道のりを歩んでこられた経験豊富な人生の先輩を前にして、あるいは、社会の最前線で全力投球で仕事に打ち込んでいる方々を前にして、あるいは、新たな人生の目標を定めようと真剣に芸術に取り組む人々を前にして、教師は果たして何を語ることができるのか。

自問し自答し努力し研鑽すること以外に、数歩先に行く教師でありつづける道はありません。そして、この心の姿こそが、大学改革にあたる大学人の基本姿勢であるべきではないでしょうか。その意味で、通信教育は、大学に真の自己改革を迫るに違いありません。

一九九八年五月九日の通信教育部開設記念式典において、芳賀徹東京大学名誉教授は、祝辞の中で次のように語っています。

夏目漱石は、少年のころから南画などをじっとみているのが好きな子どもでありました。青年のころは建築家になろうと夢見たこともありました。明治三十三年（一九〇〇年）の秋から、二年半のロンドン留学のあいだは、息の詰まるような苦しい勉強と、日本人としての心理的なコンプレックスのなかにあつて、美術館に行くことと劇場に通うことだけが唯一の楽しみでありました。そしてまた、救いでありました。

日本に帰ってまいりましてからは、しきりに水彩画を描きましたし、自分で水彩の絵はがきを一〇〇枚近くも描いては、友達やお弟子たちに自慢げに送っております。

大正年間に入ると、その死にいたるまでの短い五年間、小説の創作に努めながらも、彼は自分の暗い憂鬱な心を、ただ一つ、絵を描くことによって救っております。津田青楓、京都の出身の画家で、洋画、また日本画もやった画家であります。津田青楓を先生にして、たとえ下手ではあつても、自分でも認めるほどに下手ではありましたが、南画ふうの山水画を何十点も描いたのであります。

この四〇代なかばであつた夏目漱石が、絵を描きながら、津田青楓にあてた手紙の一節をひいて、私のお祝いの言葉にさせていただきますと思っております。大正元年十一月十八日、夏目漱石が津田青楓にあてた手紙であります。

「今日縁側で水仙と小さな菊を丁寧にかきました。私は出来榮えの如何より晝いた事が愉快で



す。書いてしまえば今度は出来榮えによって楽しみが増減します。私は今度の畫は破らずに置きました。此のつぎ見て下さい」

翌年、大正二年十二月八日、同じように漱石は津田青楓にあてて、こうも書きました。

「生涯に一枚でいゝから有りがたい感じのする繪が描きたい山水動物花鳥何でも構わないありがたいので人が頭を下げるような崇高の氣分を持ったものをかいて死にたい」

繪が好きな心を吐露して、ほんとうにいい言葉ではないでしょうか。芸術が人間を救い本来の人間に蘇らせる、魂を蘇らせるということは、このような慎しいかたちでもありうることなのであります。

日々の生活の中における芸術創造の意味を、まことに的確に、かつ鮮やかに伝えるエピソードであると思います。

通信教育で学ぶということとは、孤独な作業であることでしょう。何であれ、真剣に努力することは苦痛をともないます。しかし、孤独と情熱と苦悩は、人と人とを深く結び付ける役割も果たします。苦悩を分かち合う、新しく入学した一、四〇〇の学友を思ってください。そして、それを取り囲むように存在する一二、〇〇〇余の熱意の広がりを想像してください。

芸術的創造と哲学的思索。

良心を手腕に運用する新しい人間観、世界観の創造。

通信教育が私たちの芸術運動の重要な基盤となるであろうこと、通信教育がもたらす深く静かな、しかし情熱にあふれた芸術の運動が、間違いなく、人間の未来への希望につながっていくであろうことを、私たちは確信しています。

一九九八年 六月

## 大学名の由来

本学園は、京都芸術短期大学から出発しました。一九七〇年代後半という時代において、京都芸術短期大学の開学は、芸術系の短期大学としてはきわめて稀な存在で、全国から注目されました。

一九九〇年の四年制大学の開学にあたって、短期大学との連続性をどう考えるかなどについて、学内のあらゆる人びとの意見を聞き、また学外のしかるべき人の意見も聴きました。創立者の徳山詳直は、「京都芸術短期大学」の「短期」を外して大学名としたいと考えていました。しかし、開学当初は定員がわずかに一〇〇名で、学科も芸術学科、美術科、デザイン科の三学科で、造形芸術の分野に限られていたこと、また、本学園が、短期大学としてすでに長年「造形芸術学科」という単一の学科名称で実績を積み重ねてきたことから、「京都造形芸術大学」として、その名のもとに多様な分野を切り拓いていこう、ということになりました。

その後、開学から三〇年を経て、教育研究の対象とする分野はさらに大きく広がり、通信教育部の学科も合わせて一七学科を持つ大学になりました。現在では、多くの在校生・卒業生の活躍に支えられて、芸術全般にわたって多彩な研究・創作活動を展開するに至っています。そして、大学設立三〇周年を機に、大学名を「京都芸術大学」に改めることになりました。

芸術の力で人類の平和に貢献するという「芸術立国」と、古来より日本の芸術及び文化の中心であった京都から世界に向かって芸術と平和を発信する「京都文藝復興」という創学の理念を、学園の内外に一層明確に表明すると共に、その目標実現のために未来に向かってさらに挑戦し続ける大学であるという宣言が、新しい大学名に込められています。

